国際研究論叢　21（1）：169～181，2007

翻　訳

『ホロコースト』の放映後（下）

ギュンター・アンダース　訳：柴　嵜　雅　子*

Nach〈Holocaust〉

Günther Anders　　Übersetzt von Masako Shibasaki*

キーワード
アウシュヴィッツ、ホロコースト、ヒロシマ

＊3月11日／12日

私が「アウシュヴィッツ」と言うとき、この地名は多くの収容所、とりわけ殺戮専用の収容所で、組織的に実行されていたジェノサイドを表している。このテーマと関わりあうと、口にせざるを得ない二、三の語や言い回しがある。たとえば「集団的な罪」がそうだ。おまけにこうした表現は二者択一の形式で押し付けられる。すなわち、こうした表現を使わない者は、民族殺害の弁護人と見なされてしまうのである。イエスかノーかという答えの選択肢だけでなく、そもそも「われわれが罪を負うのか否か」という二者択一の問い自体、空虚かもしれないという意見を一考することは、最初から禁じられている。「集団的な罪はあるのか、それともないのか」というように、質問があらかじめ設定されているのである。この問いは、受け入れても答えてもいけない。むしろ、まずこの表現の妥当性を検証することが肝要である。中でも、誰がこの表現を使っているのかを考える必要がある。

元々、ニュルンベルク裁判とおめでたい「再教育」の試みから、「集団的な罪」という言葉が生まれたことに異論の余地はない。しかも生みの親であるアメリカの似非哲学者は、とうの昔にこの用語を忘れてしまっている。過去30年間、真っ当なドイツの思想家や著述家はこの表現を使っていない。実際のところ、この語をもっぱら大事に保存してきたのは、責める側ではなく罪人の方である。それは今も変わっていない。中毒とまでは言わずとも、執拗にこの語を使い続けている新聞の筆頭は、『ドイツ国民・兵士新聞』である。ワシントンの哲学的暗愚が「集団的な罪」という表現を生み出さなかったなら、元ナチスが考案したに違いない。その必要があったからである。彼らは「集団的な罪」など無意味だとはねつけ、憤激し、自分を怒れる正義の味方に仕立てあげたのだ。彼らの論法はこうだ。「集団的な罪など存在しない以上、我々は集団的に罪がなく、誰一人として有罪であるはずがない」。要するに、この語を強く否認することによって、自分に罪がないことを、他者のみならず自分自身に対しても証明するわけである。逆説的なことだが、彼らこそ「集団的な罪」の概念をかねてより利用していた。というのも反ユダヤ主義は、ユダヤ人ない

＊しばさき　まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2007.4.30受理〉

しユダのような裏切り者であるという罪が全ユダヤ人にあると前提している点で、集団的な罪というテーゼの原型だからである。もちろん、元ナチの連中はおしなべて自分が被告だと感じているので、集団的な罪は「キリスト教らしからぬ、昔の作り話の蒸し返し」だと厚かましくも言い立てて、ひどく独善的に腹を立てている。自分たちの集団的憎悪の合法性を何度も強調することによって、自分たちの正しさが認められたと感じているのである。「アウシュヴィッツにいたユダヤ人が過去の罪を許せないことは、我々キリスト教徒との根本的な相違を示している。我々はもうとっくに忘れているのだから！」。この調子では、「もうとっくに許しているのだから」とまで言いかねない。「集団的な罪」に対する憤激が声高に語られると、そのように叫んで何かを隠そうとしているのではないか、という私たちの疑惑の正当性も一段と高まる。否認スル者ニ罪アリ、なのである。

テレビで『ホロコースト』を見て、元ナチスはあらためて、この独りよがりの叫びを上げなければならないと感じたようだ。なぜなら彼らの仮定によれば、共犯という否認し得ない問題を考慮に値すると考えるだけで――もちろん、テレビ映画の脚本家や製作者も当然、これに当てはまる――、皆が有罪だと主張すること、つまり集団的な罪のテーゼのプロパガンダを行なうことになるのである。

戦勝国が「集団的な罪」を使っていたとき、それは心理的に非現実的ないし不条理な言い回しではなく、全体主義に対する勝者の反応であり、充分理解できた。実際、非全体主義国家の国民とは比較にならないほど、ドイツ人は国家の犯罪に深く頻繁に関与していた。ある意味で、集団的な罪について語ることは当然だ。ただしそれは、何かを集団で「行なった」罪というよりも、罪を負い、その罪に人々を巻き込んだ国家に対して反乱を集団で「行なわなかった」罪である。だからといって罪が軽いわけではない。不作為もまた一つの犯行である。

「そう言うのは簡単だが、拒むことなどできなかった」と反論されるかもしれない。しかし、そのように反抗「不可能」な所まで至らせたことが、そもそも罪なのだ。本心に反して犯罪的な暴力支配に同調し、その支配の治安部隊になり下がったことは罪だからだ。屈辱や抹殺に全く抵抗しなかったというユダヤ人に対する非難は、ワルシャワ・ゲットーの蜂起という反証を度外視しても、理解できない。例えばストライキといった武器を使えた7000万ものドイツ人でさえ、抵抗しようなどとは夢にも思っていなかったからだ。抵抗した英雄が再三再四、顕彰されるが、彼らは極端な少数派に過ぎず、ドイツ国民全体の特徴を表してはいない。しかしだからこそ、ごくわずかの英雄は賞賛に値するのである。

たとえきわめて歪曲されたものであれ、ドイツ人は初期から末期まで情勢について情報を与えられていた以上、全員が関与していたのであり、罪もある。犯罪的行為を熱狂して迎えるためには、多かれ少なかれ、それについて知っていなければならないからだ。「知らなかった」という言い訳は通らない。もちろん何百万もの人間の抹殺も含めて、起きていたことは当然、知られていた。共犯者と目撃者の数は何万にも及ぶ。それだけの人がことごとく口をつぐんでいたとか、あれほどセンセーショナルな事件の噂が燎原の火のように広がらなかった、などと想定するのは理不尽であり、社会心理学における最も単純な公理に反する。何も知らなかったと主張する人はせいぜい、あの頃の自分はバカだったと認

めているに過ぎない。当時、アメリカに住んでいた私でさえ、1943年の夏にはもう絶滅収容所に関する最初の風聞を耳にしていた。そして1944年の春には、それが事実だと知っていた。収容所での出来事に何千倍も密接につながっていたドイツで、何も知らなかったと言うのだろうか。たとえ真実の千分の一しか知らなかったとしても、その千分の一だけでも身の毛がよだつはずだ。工場の大量生産のような殺害が始まって3年も経過していながら、人々がショックを受けず、犯罪の直接の責任者に向かって歓声を上げていたことは、紛れもない事実である。

ある意味で、「集団的な罪」は今日でも使える。いまだに――あるいは、またもや――絶滅収容所などなかったと言い張る頑固者や、同胞を収容所で亡くした私たちに面と向かって、「＜国際ユダヤ人＞がでっち上げたほら話に、一杯食わされた」と叫ぶ恥知らずがいるが、表現の自由を尊重するばかりに、私たちの腕から喪章を引きちぎろうとするこうした輩が嘘を吐く自由を認めるなら、私たちも罪を犯すことになり、今すでに集団的な罪を負うことになってしまう。

結局のところ、集団的なのは私たちの責任だ。とりわけ、かつて起きたことを二度と繰り返さない責任が、私たちにはある。万一あれほどの犯罪が繰り返されるとしたなら、実際、私たちの誰一人として無罪ではいられまい。そのときは、「集団的な罪」について語ることが許容されるのみならず、義務とされるだろう。

＊3月13日

35年の潜伏期間の後、『ホロコースト』が引き起こした衝撃は、このテレビ映画がなくても生じただろうか。そんなことはまず無理だろう。何の動きもなく感情の鈍麻が続き、ヒトラー以降のドイツ史の中で、おそらく最も深く心に突き刺さる出来事となった集団的ショック――決定的な「転換」とまで言う勇気はまだ私にはない――は、起きなかっただろう。これは本当に恥ずかしいことだ。ドイツ人に真実の時を告げる鐘は、外国から鳴り響いてきたからである。夜明けは「幸運」にも、外からドイツ人のもとに転がり込んできた。あの映画を撮影したのはドイツ人ではない。ドイツ人は自分の正しさを鼻にかけ、いつも他人に自己責任を要求して、「各人、自分の門前を掃け」と説いているが、今回、ドイツの門前を掃いたのはドイツ人ではない。ホーホフートの名作｛ロルフ・ホーホフートの戯曲、『神の代理人』のこと｝は唯一の例外だ。ホロコーストに関するその他の著書は、私のような亡命者か、かつての犠牲者の筆になるものばかりだ。ともかく、『ホロコースト』を作成した動機が何であれ、それを悪いものと考える理由はまずないし、出来上がった作品は単なる娯楽映画や感動物をはるかに凌駕し、高い収益にもかかわらず――医者にしても診療代は取るものだ――、政治的・道徳的な作品となっており、しかもそのようなものとして実際に受容されてきた。放映を開始して何分もたたないうちに、視聴者は「視聴者」であることを止めた。ドイツにおける最もシリアスな雑誌の最もシリアスな編集長と見なされている某氏などは、テレビを見る何日も前に、「金儲け主義のハリウッドが作ったセンチメンタルな商業映画」についてこき下ろす記事を発表していたが、彼のように放映前から拒否していた人を別にすれば、道徳のことを考えずにいられた人、自失・羞

恥・苦痛・吐き気・憤激を感じずにいられた人は誰もいない。カントの「美しき仮象」の理論は、何と遅れていることか。というのも、この映画が私たちに伝えるのはおぞましい仮象、より正確に言うなら、おぞましいことの仮象であり、それは実物を知覚させても、芸術という手段を使うときほどうまくは伝えられないのである。しかも私たちが受け取るのは「仮象」ではなく当時の現実であり、この現実を把握するために、まず「フィクション」に変える必要があったのだ。にもかかわらず、「リアリズム」について語るのは無意味だろう。目に見えるリアルなものの写しがあるわけではなく、むしろ映像を通じて、歴史的にリアルで目に見えるものが生まれて来るからである。カントの「関心なき適意」は何と時代遅れになったことだろう。というのも、この映画を受け取る態度の本質は「適意」ではなくおぞましさにある上、「関心なき適意」ではなく、深い関心に、きわめて強い「アンガージュマン」に存しているからである。「アンガージュマン」は戦後に登場し、視聴者ではなく著者の性格付けに用いられた言葉だが、ここで用いるのを許していただきたい。シラーは劇場が「道徳的施設」となることを期待していた。この点ではブレヒトもシラーとさほど変わらず、教育的戯曲では道徳を伝えようとした。シラーやブレヒトが望んだことが、『ホロコースト』では現実のものとなったのである。ある批評家は、このテレビ映画が自分の全作品の千倍もの反響を呼んだことにルサンチマンを抱き、あれは「傾向劇でしかない」ので価値がない、と図々しくも言い放った。それなら、どんな説教も価値がないことになるだろう。何しろ説教はみな、特定の傾向を持っているからだ。またある批評家は、何千万人もがこのテレビシリーズを見て涙を流したがゆえに、典型的なハリウッドの「お涙頂戴もの」だと謗った。さらに別の批評家は、「テレビ画面が警告の道具として『乱用』されるのは好まない」とのたまい――「乱用」の意味が、これで分かるというものだ――、しかもそれが、この映画に真実がない論拠になると考えていた。今やこのような批評家自身が嘲笑を、それも数千万人の嘲笑を買っている。

＊3月14日、夜

先ほどＲが、さげすむように反論してきた。「だがね、彼らは35年前からずっと知っていたんだよ！」。それに対して、私は問い返した。「知っていたから、どうだと言うんだい？」。というのも、「知る」というのは、関与の形態の中でも最も薄弱なもので、「関与しない」とほとんど変わらないからだ。「知らないことに、心は動かされない」という諺があるが、「単に知っているだけのことにも、心は動かされない」のである。私のごく初期の寓話で半世紀以上も前に書いた「塔からの眺め」{同名の著書、『塔からの眺め』の冒頭を飾る一篇} において、私はある女性を考え出した。彼女は息子が事故で死ぬのを展望塔の頂上から目撃したが、それはまるでオモチャの世界の出来事のように見えた。通りに降りて行けば、息子の死を単に知るだけでは済まなくなるので、彼女は下に連れて行かれるのに抵抗し、「そんなことをしたら絶望してしまうじゃないの！」と叫んだ。ドイツ人も600万人の死を目にしながら、この女性と同じ様に振舞った。下の通りに連れて行かれて、出来事を目の当たりにすることを拒んだのである。しかし今やドイツ人は下へ連れて行かれ、単に知っているだけではなくなり、ようやく絶望した。ありがたいことに、よう

やく彼らは絶望したのだ。ただドイツ人の名誉のために言っておくが、真実を初めて一瞥し、今までは「単に知っている」だけだったことに気づいてからは、ありがたいことに多くの人が筆舌に尽くしがたいシーンを何時間も辛抱強く見続けた。真実を是が非でも知りたくなって、放送を見逃した人々のためだけでなく、自分自身のためにも再放送を求める者も少なくなかったのである。

＊3月16日

テレビがそのような影響力を持ち始めて、まだ間がない。最初の例は、ベトナムの戦場のテレビ放送だった。それは私が25年前にラジオとテレビについて書いたエッセイ「幻影と鋳型としての世界」で用いた意味での「幻影」だったが、実際の経過を初めて本当に教えてくれた。あのエッセイではテレビの影響を明示するために、幻影は現実を「些細なことに見せる」という言い方をしたが、ベトナム戦争のテレビ放送ではそのようなことは全くなく、自ら見に行くことができない出来事を多くの人に現実として周知させ、そのおかげで人々が実際に介入するようになった。こうした「幻影」がなければ、いまだにベトナムで戦争が荒れ狂っていないとも限らないのである。

それにしてもあのホロコースト映画の場合は、もっと特筆に価する現象である。私たちが見たのは、いま実際に起きていることの幻像版ではなく、時間的に離れた、つまり35年も前に起きたことであり、しかもそれは実際に起きたことではなく、フィクションであった。しかし驚嘆すべきは、このフィクションこそが私たちに事実を伝えてくれたのであり、フィクションを通してのみ、とうの昔に過ぎ去ったことの事情を理解できたということである。いや、こう述べただけでは充分ではない。そのようにフィクション化することが不可欠なのは、知らされるべき真実がもはや知覚できないからだけではない。その理由は何よりもまず、第二次世界大戦を含めて現代的事象は余りにも規模が巨大なため、知覚も認識も不可能なことにある。現代世界の本質は、それがもはや見かけ通りではなく、姿を見せず、ある意味で見えなくなってしまったことである。ガス殺の設備や大量殺戮兵器や原子炉の外見が、どれほどその威力を明かしてくれるだろうか。単に真理を知るためではなく、私たちが生き残るためには、このような「不可視性」は無くさなければならない。不可視性を排除するには「レンズ」がいる。それも、物を拡大するのではなく、「縮小」してくれるレンズだ。

『時代遅れの人間』第１巻では、「真実については実際より大げさに語る」ことを推奨したが、ここでは逆に、「真実については実際より抑えて語る」ことを勧めたい。すなわち、大きすぎて把握できない真実を縮小して、少しでも真実に触れられるようにするのである。これこそテレビ映画の『ホロコースト』が実施し、成功したことなのである。テーマを「実際より抑えて」扱うことによって、つまり控え目な表現によって、初めてこのテーマは数千万人の視界に入り、心理的にも受容可能になったのである。

＊3月19日

世界が滅びるのはアウシュヴィッツのような大虐殺によってではなく、ヒロシマのよう

な原爆投下によってであるという事実があるにしても、倫理的にはアウシュヴィッツはヒロシマと比較できないほど酷かった。私がこの点を強調するのは、自分の覚書をパラパラとめくっていて、アウシュヴィッツと取り組むとき、「大量虐殺の一形態に当てはまることは、他の形態にも当てはまる」という先入観に囚われていたのではないかと思ったからである。この先入観は間違っている。アウシュヴィッツの犯罪者――その数は膨大である――と比べれば、日本に原爆を落としたパイロットたちは天使だった。それが「進歩」であるか否かは、また別の問題である。

ヒロシマの場合、いわば「スイッチを押す」だけだった。このことは、現在の「核ミサイル」には一層当てはまる。1945年にはまだ現場まで行って爆弾を落としていたが、今はその必要もないからだ。人々は自分の行動――この場合はたった一つの手の動き――が及ぼす結果から、遠く離れていられる。実際、今日では全労働者の99％が、自分の労働の最終的産物から切り離されている。そもそも「ミサイル」の発明以来、「犯行現場」という概念は無意味になった。元来それは、犯罪が行なわれなおかつ被害が生じた一つの場所を意味していた。このような加害と被害の「場所の一致」は、火気の発明以来、消え始め、今では稀にしかない――ソンミ事件は例外だ。太平洋で発射されたミサイルは、シベリアで爆発しうる。では犯行現場はどこなのだろうか。太平洋か、シベリアか。私たちは今日の道徳と不道徳の決定的概念として、「場所の分裂」を導入しなければならない。ともあれ、不幸な二つの町に原爆を落とした米空軍の二人の機長は、アウシュヴィッツでの慣行とは異なり、何年にもわたって何十万もの犠牲者に屈辱と苦痛を与え続けたわけではなく、そもそも犠牲者を見たことがない。いや思い浮かべたことすらないのである。機長の指は一点の汚れもないままだったが、それは「アイヒマンとその一味の指の爪が綺麗だった」と言うのとは訳が違う。機長は大量殺人の計画を立案したことは一度もないし、ましてや死体製造を日々成功させるための必要条件を、時間をかけて念入りに作り出そうとしたりしなかったからだ。さらに機長は海外への「特別任務」に参加していたので、現場で直接囚人を相手にして、拷問、薬剤注射による殺害、「シャワー室」への追い込みといった野卑な所業を絶えず行なっていた多数のＳＳ隊員やその「助手」と、同列に置くことはできない。またヒロシマのパイロットが「特別任務」に参加した理由は、「サディストだったから」とか「喜んで人殺しをするようになっていたから」とは主張できない。彼らは命令がなければ、原爆を投下しなかっただろう。同様に、機長たちは一度だけスイッチを押すという自らの行為や日々の卑劣な行動によって、非人間的になってはいなかった。ヒロシマとナガサキで起きたことは、殺人者なき大量殺人であり、何の悪意もなく遂行されたのである。

以上のことすべてが、アウシュヴィッツの殺害者には当てはまらない。二つの大量殺戮方法を区別するのに、これほど明白な境界線はない。「無垢な悪」（イーザリー）とは対照的な「凡庸な悪」（アイヒマン）がアウシュヴィッツには存在しただけではない。それと同時に、いや何よりもまず、本物の悪人の悪意や、絶えざる悪行によって逃れがたく悪人になってしまった者や悪人にさせられてしまった者の悪意があった。これはイーザリーが関わった大量殺人と根本的に異なる点だが、アウシュヴィッツの悪人たちは、絶えず屈辱

的な扱いをし、拷問を加え、薬物注射で殺すといった形で、毎日フルタイムの仕事としてこなしていたことが悪だと認識できていなかった。自分がもはや後戻りできないほど悪に染まってしまったことにも、気づいていなかった。彼らは生きている囚人を「まだ苦しめ得るもの」――これが収容所における「生命」の密かな定義である――としてしか見ず、そうした人間の取扱が実際に行なわれただけでなく、許可され義務にまでなっていた。これらすべては結局のところ一点に帰着し、ヒムラーはそれを誇るべき英雄的な「忍耐」と呼んだ。それは彼らにとってもう当たり前になっていた。しかもその理由は、通常のように倫理に無関心な日常世界の背景から悪が浮き上がるのではもはやなく、悪自体が世界――いわゆる「収容所的世界」――となり、ごく普通の日常と化し、それと対照をなすのはせいぜい私たちの言う日常的なこと、つまり破廉恥でない、あるいは卑劣でない言葉や行為だったからだ。「おやすみ」という何気ない挨拶も、アウシュヴィッツの地獄でＳＳ隊員の口から出るのは異常なことだった。ちなみに、「地獄」という表現は綺麗過ぎる。古典的な地獄は悪人のための流刑地だったからだ。もっともナチスは、収容所に放り込んだ人々を、ユダヤ人、ジプシー、マルクス主義者という生来の悪ゆえに「罰して」いるつもりだったので、「地獄」でよいというかもしれない。

以上のようなことは、イーザリーのように核の犯罪に巻き込まれた犯人には当てはまらない。彼らは道徳的にＳＳ隊員よりはるかに高い。いや、そもそも比較できない。しかしだからといって、彼らの犯罪がそれほど恐ろしくなかったというわけではない。逆である。ヒロシマはアウシュヴィッツと比べ物にならないほど酷かった。たった一人の人間が何分の一秒かで二十万――今日なら何百万――もの人を消し去ることと比べれば、数千人のＳＳ隊員で数百万人を少しずつしか殺せなかったことなど、この言葉を許していただきたいが、他愛無いものだ。核の危険は全人類の存続を脅かすが、絶滅収容所についてそのようなことは主張できない。核兵器は文字通り「終末論的」だが、収容所は比喩的にしか「終末論的」とは呼べない。現代の大量殺人の方法と比べれば、ヒロシマの３年前に絶滅収容所で起きたことなど、勇気を振り絞って敢えてこう言うが、他愛無かった。今日のミサイル基地の技術水準や性能と比較すると、収容所の設備のテクノロジーとアウトプットは依然としてお粗末で、型としては19世紀に属する。収容所の装置を一回稼動させて「こなせる」のは十万や百万の単位ではなく、再び震えながらこう書くのだが、数百で「しか」なかった。

「未来」が現代の大量殺人の手中にあることに、疑問の余地はない――ただし、未来を喪失させる機械に「未来」があるとしてのことだが。もちろん発展途上国においては、アウシュヴィッツが依然としてお手本と見なされる可能性は否定できない。まだまだヒロシマのような惨状を作り出せない国は、「アウシュヴィッツ」のような設備で我慢するだろう。つまり、全世界で「未来が始まって」いるわけではない以上、アウシュヴィッツの原理にもまだ未来はあるわけだ。ジェノサイドの現代的な方法と、それほど現代的ではない方法の二つは、私たちがそもそも生き残ることを許されている限り、しばらくは「併存」するだろう。

＊3月22日

今日、雑誌『H』に妬みがましい記事が載った。「ユダヤ人ではない戦争の犠牲者だって何千万といた」。文面にはないが、私たちユダヤ人が「戦争の唯一の犠牲者として主賓席を独占しようと、またもやしゃしゃり出てきた」と言いたいようだ。

そんな特別席などさっさと放棄できたら、どれほど嬉しいだろう。しかし本当は主賓席などではないこうした位置づけに、異論の余地はない。確かに戦争では、「単に」亡くなった犠牲者がいた。何百万人ものドイツの兵士と市民のように、ヒトラーが自らの政治目標を達成するために、「甘受した」犠牲者もいる。また敵の兵士や人民のように、たとえ大量に死亡しても、それは戦争目的に利する手段と見なされた犠牲者もいる。しかし収容所で死んだユダヤ人は、そのいずれでもない。私の同胞であるユダヤ人の殺害は、代価でも手段でもなく、それ自体が目的だった。偏執病的なことに、ナチズムの主要目的の一つでさえあった。それゆえユダヤ人の死者、そしてスラブ人やジプシーの数多の死者は、近代の他の戦争の死者は言わずもがな、第二次世界大戦の戦没者とは全く別の意味で、殺害されたのである。不憫にもあの戦時中に命を落としたすべての人に、畏敬の念を捧げよう。だが他の犠牲者より一段と残酷な殺され方をしたユダヤ人に腹を立て、私たちが新たに特別待遇を要求していると思い込み、「だからユダヤ人がガス室で殺されたことには、やはり理由がないわけではなかった」と考えている人は、唾棄すべきだ。

＊3月26日から27日にかけての夜

それにしても、なぜだろう。トート機関で道路建設にでも動員した方がよかったのに、なぜ数百万人を抹殺したのだろう。代わりに占領地から数百万人もの外国人労働者を内地へ連行しなければならなくなったのに、なぜユダヤ人を殺してしまったのだろう。国防軍とその膨大な量の物資運搬のために、どんなオンボロの貨車でも必要としていた時期に、なぜ途方もない数の車両を要求したのか。ユダヤ人殺害方法の詳細にわたる叙述を読んでも、その理由、もっと正確に言うと、その目的は理解できない。ユダヤ人の絶滅は何を目的としていたのか。答えは、ユダヤ人の絶滅である。それは手段ではなく目的だったのである。

というのも、「ヒトラー・ヒムラー会社」にとって、ユダヤ人はあらゆる否定的なものを体現していたからだ。これは同時に荘重な通俗形而上学であり、きわめて大がかりな戦術的・政治的なデマゴギーだった。要するにユダヤ人は、悪・汚穢・退廃・欺瞞・金銭欲・色欲の権化だったのである。なぜそのようなユダヤ人像が必要だったのか。その理由はいくつかある。

第一に、実のところ馬鹿ではなかったヒトラーが、他の誰よりもはっきりと認識し、活用したことなのだが、「神が死んだ」だけでなく――そんなことなら誰でもとっくに知っている――、「悪魔も死んだ」からである。大半の人々、特に何らかの権利を奪われている人々は、鬱積する攻撃性やルサンチマンを吐き出せる相手がいなければ、つまり悪魔の代役がいなければ、神の代役――自然、愛、芸術――がいない場合と同様、生きていけないからである。ヒトラーは彼らに「悪魔の代役」として「ユダヤ人」をプレゼントした。

この「ユダヤ人 {der Jude}」という単数形の表現は、ユダヤ人を不気味に思わせるために好んで使われたが、それは不気味さを際立たせるために悪魔を単数形で表わすことに対応している。宗教の論理からして、悪魔は明るい対立像を必要とし、また可能にするがゆえに、悪魔を贈った者はそのような対立像、つまり繁栄（ハイル）をもたらす者として登場し、「ハイル・ヒトラー」の挨拶で自らを神格化することが難なくできたのである。ユダヤ人がいなければ、ヒトラーは神に似た存在にまでのし上がれなかっただろう。彼がとてつもない地位につけたのは、ユダヤ人のおかげなのである。実際、誰かを悪魔化せずには、個人崇拝は成り立たない。トロツキーを悪魔に仕立てなければ、スターリンはソビエトのすべての人々のゴッドファーザーには決してなれなかっただろう。トロツキーへの憎しみを人工的にかき立てずに、あれほど多数の人間を殺害したなら、スターリン自身が憎まれていたことだろう。反トロツキー主義が反ユダヤ主義に転換したことは、もちろん偶然ではない。

第二に、独裁者たちは善悪の存在論化を必要とし、大多数の人々はそうした「存在論化」を渇望していたことが挙げられる。私のいう「存在論化」とは、所行、徳と悪徳、正統と異端、義務の履行と不履行、志操を、「よい」ないし「悪い」と見なす――これは多数派が決して内面化したことのない倫理である――のではなく、むしろ何らかの存在者を「よい」ないし「悪い」と見なすことである。たとえば不可触民は、あれこれのことを行なったり行なわなかったり、また考えたり考えなかったりしたがゆえに劣ると見なされるのではなく、不可触民と見なされているがゆえに――そして反抗しない限り、本人も自分が不可触民だと見なしているがゆえに――、不可触民のようにしか行動したりしなかったり、考えたり考えなかったりするのである。こうした「倫理」では、「よい」か「悪い」かは存在の質である。「高貴」を意味するギリシア語の＜esthlos＞が、「存在」を意味する＜einai＞に由来するのは、偶然ではない。同様に、かつて貴族が高位と見なされ、今でも各地でそう見なされているのは、少なくとも何よりも業績や志操に基づいているのではなく、貴族にまつわる表現が自ずと明かしているように、「生まれた家がいい」からである。「高貴は道徳的世界にしか存在しない」というシラーの主張とは異なり、「よさ」は「道徳的」性質ではなく、「血統の性質」なのである。ヒトラーはブルジョワの道徳概念を跳び越えて、こうした貴族の概念を再び持ち出した。もっともそのやり方は、無謀で逆説に満ちていた。というのも元来の基準、すなわち生まれた家という基準を保持しながら、彼は他ならぬ凡人の大衆を貴人に仕立てたからである。そんなことは先例がなく、プロレタリアートはせいぜい「歴史的前衛」として理解されていたに過ぎない。しかもかつての貴族は、大衆から際立つ存在だった。ヒトラーは国民の99％に、彼らがエリート、いや唯一のエリートであることを信じさせた。そしてそれが成功するためには、大衆が自分を「貴族」（＝優越種族）と見なせる比較対照物が必要だった。それは「卑劣」な人間像で、それと比べれば自分の方が「優れている」と大衆は感じることができた。したがって彼らの高貴性や自信は、ユダヤ人ではないことに基づいていた。彼らが「本物」で高貴だったのは、ひとえに多数派という「よき家」の生まれだったことによるのである。先述した通り、この主張の馬鹿馬鹿しさは前代未聞だ。階級社会がある間、つまり私たちが概観でき

る歴史の全期間において、貴族階級はつねに少数派であり、非貴族が圧倒的多数を占めていた。今や「大衆貴族」、「平俗貴族」といった新語を作れるかもしれない。もちろんそれは歴史上、最も卑怯で不公正な貴族である。何しろ何千万もの貴族が憚ることなく、数十万人を宿敵かつ生贄として選び出したからである｛1933年、ドイツの人口、約6500万のうち、ユダヤ人はおよそ50万人で、全体の0.7％でしかなかった｝。ただし、ほんの数十万と言っても、彼らは途方もなく誇張して世界的強国（「国際ユダヤ人」）と呼んだ。こうしたユダヤ人という対立像がなければ、全ドイツ人に自分はエリートだと吹き込むことは決してできなかっただろう。まだスラムをうろついている失業者も含めて、ドイツに住む人間の99％は貴族の位を授けられたので、貴族とは程遠い自分の生活状況には目をつぶった。アーリア人証明書は大衆用の「宮廷年鑑」で、どの階級に属していようと誰でもそこに載せてもらえたのである。ヒトラーは何千万人ものドイツ人をこのように貴族に列することで、自らが引き起こした損害、つまり階級への帰属とあらゆる市民的自由の剥奪を賠償した。だからこそヒトラーには「ユダヤ人」が必要だったのである。

もし仮に「ユダヤ人」がいなければ、ヒトラーはそれを案出しなければならなかっただろう。しかし、なぜ「もし仮に」なのか。それは、必要だったから彼が引き立て役として使った「ユダヤ人」など実際には存在せず、『シュトゥルマー』｛反ユダヤ主義の週刊誌｝の扇動的なカリカチュアの中にしかなかったからである。後に収容所で「ユダヤ人」が本当に存在するようになったのは、これは実に恐ろしいことだが、ＳＳ隊員が虐待によって本来のユダヤ人を変貌させ、『シュトゥルマー』で描かれたカリカチュアそっくりに見えるようにしてしまったからである。致命的な戯画によって本物が創り出されたのだ。ある存在者（アーリア人）が生まれつき変更不可能な形で善を体現し、また別の存在者（ユダヤ人）が同様に生まれつき変更不可能な形で悪を体現するならば、もはや自由（善か悪かの選択）は存在する場がなく、しかもこれまた変更不可能である。そうなると同様に変更不可能な形で、「当為」が存在する余地もなくなる。当為は言わば、存在と必然の間で押しつぶされてしまうからである。

これこそナチズムの独裁の意図だった。必然が支配するところに当為はあってはならない。アーリア人として存在する者は、必然的なことを行なわねばならず、逆にユダヤ人として存在する者は、必然的なことを苦しまなければならないのである。

ナチズムが「非道徳的」だったというのは、究極の控え目な表現だ。というのも、ナチズムの画期的な「業績」は、当為というカテゴリーそのものの除去だったからである。この除去の主たる犠牲者が、「十戒」と「山上の垂訓」によって「当為」を基礎付けた民の子孫であったことは偶然の一致ではなく、当為に対する世界史規模の復讐なのだ。ヒトラーは「定言的」という形容詞がお気に召して、しばしばカントの「定言的命法」に言及したが、「すべてを粉砕する」とシラーが呼んだカントを、ヒトラーは粉砕してしまったのである。

＊3月28日

「純粋」という一言。ナチの「形而上学」においては、世界とまでは言わずとも全人類

が、その本性からしてプラスとマイナス、純粋と不純に分かたれる。これは魔術的「形而上学」と全く同じである。プラスとマイナスのどちらに属するかは、アプリオリに決定されている。この点は、従来の大半の教義とは大きく異なる。それらの教義では、善くなって正統の信仰を持ち救われるようになるという可能性が開かれていた。それに対して、アーリア人になることはできない。善き意志を持っていても役に立たない。ユダヤ人は収容所の囚人となる前から、致命的な自らの出自に囚われているのである。ユダヤ人はユダヤ人であり続けるように呪われており、それゆえ呪詛の言葉を投げつけられるのである。健全な世界（ハイル）」――道徳的に損なわれていない耳の持ち主にとって、これまた耐えがたい表現だ！――では、そこに属する恩恵に浴した者は互いに「ハイル・ヒトラー！」と挨拶しあっているが、そこではユダヤ人は彼らにとって不可欠の対立像であり、災厄（ウンハイル）の化身なのである。アウシュヴィッツへと追い立てられた人々を出迎えたのは、門に書かれた別の有名な言葉｛「働けば自由になれる」のこと｝だが、その代わりに「健全な世界」と書くべきだったのだ。

「純粋」という一言。それを聞くたびに、私は震える。私にとってこの言葉はいつまでも、「私たちはドイツをユダヤ人ゼロにいたします！」という誓いと結びついているのだ。純粋という理想は性的純粋さに限らず、いつも狂信者の理想だった。恐らく獣姦に対する恐怖のせいだろうが、彼らは外人のハンカチや体にたまたま触れたり、混血すること――「人種汚辱」――を恐れ、恐怖の対象を「タブー」にしてしまった。「不可触民」というわけだ。最も恐ろしい場合、こうした接触に対する恐怖は純白の柔和な上辺を装い、がちがちの貞潔や菜食主義として現われる。600万人の死に責任があるヒトラーがレバーソーセージには決して手をつけず、レタスやニンジンばかり食べながらユダヤ人やジプシーやスラブ系諸民族の壊滅を実行したことは決して矛盾ではなく、逆に筋が通っている。というのも狂信的に純粋な者にとっては、一切が汚らしいからである。汚らしいものは触れてはならないだけでなく、根絶せねばならないのである。

＊4月5日

さらに一見したところ純粋や清潔の称揚と一致しがたく見えるが、社会ダーウィニズムも決定的な役割を果たした。これもまた抹殺の正当化に用いられたのである。純粋なものは起源と同一であり、他方、社会ダーウィニズムは未来と関わっている。社会ダーウィニズムの観点からすると、肯定されるべきは「健康」――これは純粋と同義とされる――であるがゆえに生きる権利を持つもの、つまり生きるべきであり生きるであろうものなのである。また機械的・動物学的な進歩を保証するダーウィンのきわめて特異な存在論的根本テーゼは、生きているものは生存競争に勝ったに違いない、さもなければそれはもはや存在していないはずだ、というものである。要するに「生きている」＝「生き残ってきた」、「存在」＝「依然として存在している」であり、生き残りをかけた競争と勝利が存在論的概念として用いられるのである。あらゆる種は依然として存在していることによって、生存競争における強者として勝利し、それゆえ生存の権利を持つことを証明する。その種が勝たなかったならば、恐竜などのようにもはや存在せず、生きる権利を失ってしまってい

ただろう。

ヒトラーはこのダーウィンのテーゼを、理想ないし要請へ変えた。彼の論によると、我々は生きるため、生きる権利を持つためにダーウィニズムを引き受け、他者の屍を超えて他者よりも長く生きねばならない。「競争者を凌駕し抹殺するがゆえに、私は存在する権利を持つ。殺人は存在の条件なり」。

ここでまた本題に戻るが、生き残るために不可欠の犠牲者を体現するモデルが、ユダヤ人である。それゆえアウシュヴィッツは、ナチズムの政策におけるおぞましい出来事の一例というよりはるかに大きな意味を持ち、むしろナチズム的存在論の具現であり、その中心なのである。いまだに絶滅収容所などなかったと主張する人々は、このことを見事に予感していた。彼らが否認しているのは単なる一つの事実ではなく、ナチズムの原理そのものなのである。

もっとも、こうした社会ダーウィニズムがあれほど大きな、まさに決定的な役割を果たしたことは、同時に極めて奇妙でもある。なぜなら、まさにユダヤの民こそ、他の民族よりも目だって長く存続してきており、本当なら生存権を持つことを証明しているからだ。しかしこの矛盾は見かけだけに過ぎない。他に例を見ない仕方で、不死とまでは言わないまでも「生き残る力」を証明してきた――「永遠のユダヤ人」と言われた――からこそ、ユダヤ人は唯一真剣に受け取るべき競争相手となり、邪魔物として取り除かれねばならなかったのである。さらにナチズムは、市民的平等が始まったころからの反ユダヤ主義的な伝統を受け継いで、不死性の新しい概念を用いた。有名なヘーゲル用語をもじって、私はそれを「悪しき不死性」と呼んでいる。というのもナチズムの説によると、ユダヤ人は自分の力ではなく他人を犠牲にして、つまり寄生動物としてのみ生き残ってきたのであり、本当は最も弱いにもかかわらず、強者に「たかり」、「我々が払う犠牲によって」生きることによって、依然として存在しているからだ。そのように一見強く見える者が我々の力を「搾取」するのを我慢してはならないことは、明白である。もちろん、いま使ったいくつかの言葉は、きわめて強力に人を刺激する語である。しかもそれらは資本主義の幼稚なイメージ作りにも使われるため、労働者階級でもはびこることになったのである。

＊4月7日

ユダヤ人に対する敵意は、資本主義に対する敵意の代替物である。1920年代に見られた階級間の激しい憎悪を単純に存在しないものとして扱うわけにはいかず、鬱積した憎しみを一朝一夕には消せないので、現存する憎悪の総量を利用し、それどころか増大させて別の対象物に向かわせることが最も得策だということを、ヒトラーは見抜いていた。つまりこれは初めての大々的な「偽装表示」の事例である。憎悪の対象が資本主義から「ユダヤ人」に変更され、本物のユダヤ人は人工的に生み出された「憎しみ」の餌食にされた。もっとも、ユダヤ人と資本主義の同一視はヒトラーの発明ではなく、100年の伝統を持つ。マルクスの「ユダヤ人問題」の中ですら、こうした同一視は危険な力を発揮していたし、グロス｛ゲオルゲ・グロス。1893～1959。画家、版画家｝とヴェーバー｛A・パウル・ヴェーバー。1893～1980。素描家｝に至る初期資本主義のカリカチュアにおいて、資本家は

よくユダヤ人のように鉤鼻で、相場士の帽子をかぶっていた。『シュトゥルマー』はこうした伝統に結びつきさえすればよかったのである。ちなみに同様の虚像は共産主義を恐れる人々にも提供された。ナチのプロパガンダは、資本家だけでなくボルシェヴィズムの戯画でも鉤鼻を用いた。『シュトゥルマー』では、トロツキーはまるでロスチャイルドの痩せた弟のように見える。ソヴィエトの『クロコディール』でも同様だ。

かくしてきわめて便利なことに、憎むべきものすべてが溶け合って一つの「否定的偶像」が出来上がった。そしてこの偶像を憎むことは許されただけでなく義務であり、いや強制された。真に憎むに値する対象に、ほんのわずかも憎悪が向けられないようにするためである。その後の経過を見てもらいたい。憎んでもよいとなると、いや憎むべき、いや憎まねばならないと、人はやがて憎しみの対象に固着し、心理的に離れがたくなってしまう。ヒトラーがドイツ民族にプレゼントをしたのは、本当である。彼は憎むチャンスを贈ったのだ。その結果、今日なお大勢の人が、当時プレゼントされた憎しみから離れられないでいる。

ユダヤ人の虚像は――これがその第二の存在理由だが――完全な圧政下で生き、そして死ななければならなかった人々に、自分も他人に圧力をかけてエリートになれる思いがけない機会を与えた。モールシアの諺に、「忠実な従者が欲しければ、奴隷を与えよ。そうすれば、彼は自分が従者に過ぎないことを忘れるから」というのがある。そうした従者の奴隷として、ユダヤ人はホロコーストで死んだ。私はと言えば、当時、本来なら従者の奴隷の一人にならざるを得なかったが、45年後の今、過分にもまだ生きており、殺人者が雇った殺人者の解釈に勤しんでいる。そしてその合間に窓の外を眺めると、向かいの防火壁にいまだに、いやまたもや書かれたホロコーストのスローガン、「ユダヤ人はくたばれ」が目に入ってくるのである。

Ｒは信じられないかのように頭を振りながら、私がこんな思想をつむぎ出すのはとても「勇気」がある証拠だ、と語った。この賞賛は全くお門違いだ。収容所は言うまでもなく、全体主義国家でわずかの文句を垂れることの方が、私のラディカルな思想など比較にならないほど多くの「勇気」を要した。自分の思想のせいで時折、嫌な目にあうけれども、身体に危害が及ぶ危険はない。もちろん、だからといってこの思想を放棄してよいわけではない。真理が真理であるのは、語るのに勇気がいるからではない。発言するのが極めて危険な馬鹿話もある。収容所では、阿呆もまた殺されたのである。

以上に記したことはすべて、拙著、『終末と時代の終焉』で考察した問題と、きわめて密接に連関している。ヒロシマとアウシュヴィッツは事実、現代のモラルに関する二大スキャンダルにして課題であるので、これらに関する諸々の文章全体を総括するタイトルは、「最大の道徳（マキシマ・モラリア）」となるだろう｛アドルノの著書、『ミニマ・モラリア』を念頭に置いていると思われる｝。